

報告

大日堂舞楽調査報告

太田和夫・庄内昭男・嶋田忠一

はじめに

本調査は、「勝平得之の作品と秋田」展を行うに際して実施された、展示準備のための調査であった。期間は昭和50年12月30日から51年1月2日までであった。参加した人数は5名である。

昭和50年5月開館して間もない頃、次年度の開館一周年にあたる5月5日からどんな展示をやるべきかが問題にされ、そこで「勝平」展が展示担当者から出てきたのであった。それから「勝平」展決定まで様々な批判があったり、代案の不足などから2ヶ月間を費し、博物館としては9月になってからようやく準備を開始していいとの結論に達したのである。このように、さらに短縮された準備期間のなかで、第二展示室の理念と合った展示としては「勝平」展が最も進め易いものであった。なぜなら、博物館に勝平家から版画作品百点が寄贈され、これに美術部門の収集品と合わせて二百点近い作品があったこと、また勝平の版画は素材を秋田の風景・民俗・年中行事に求めていること、などの要素があったからである。

勝平得之は明治37年に秋田に生まれ、昭和46年に死去するまで生涯秋田を素材にして版画を制作した。このような版画家が、その時々何を感じ、何を考え、秋田をどう見たかをうかがえる展示にするために勝平得之のその人と作品の背景にあるものとの調査が必要とされた。この調査の中のひとつに大日堂祭堂調査を行ったのである。

勝平得之は、昭和10年ごろから八幡平小豆沢の大日堂を訪れ、毎年奉納される舞楽の取材を始めた。翌11年には、これらの舞楽を八部作に仕上げるため、墨刷の制作に着手し昭和15年に完成している。さらに同18年には多色刷に取りかかり、6年後の23年によく「大日靈貴神社舞楽図八部作」ができあがった。「駒舞」と「鳥舞」、「五大尊舞」と「鳥遍舞」、「御常楽」と「権現舞」、「工匠舞」と「神子舞」、を形式的には各々対に構成し、紺の染紙に舞だけを簡略化して刷りあげている。このような構成、形式、技法は、彼の作品群のうち特異なものであって、これに類似するものとしては、「赤童子・白童子」の作品だけである。いわゆる勝平流の風景・風俗描写とは異った作品といえよう。

以上のように、勝平を多年にわたる取材と制作に向か

わせた大日堂祭堂の実体とはどのようなものなのか、得之はこれを作品の中にどのように生かしているか、など「大日堂舞楽図八部作」の背景にあるものをとらえられればと考え、また展示の底辺を上げられればという願いから調査を行なった。

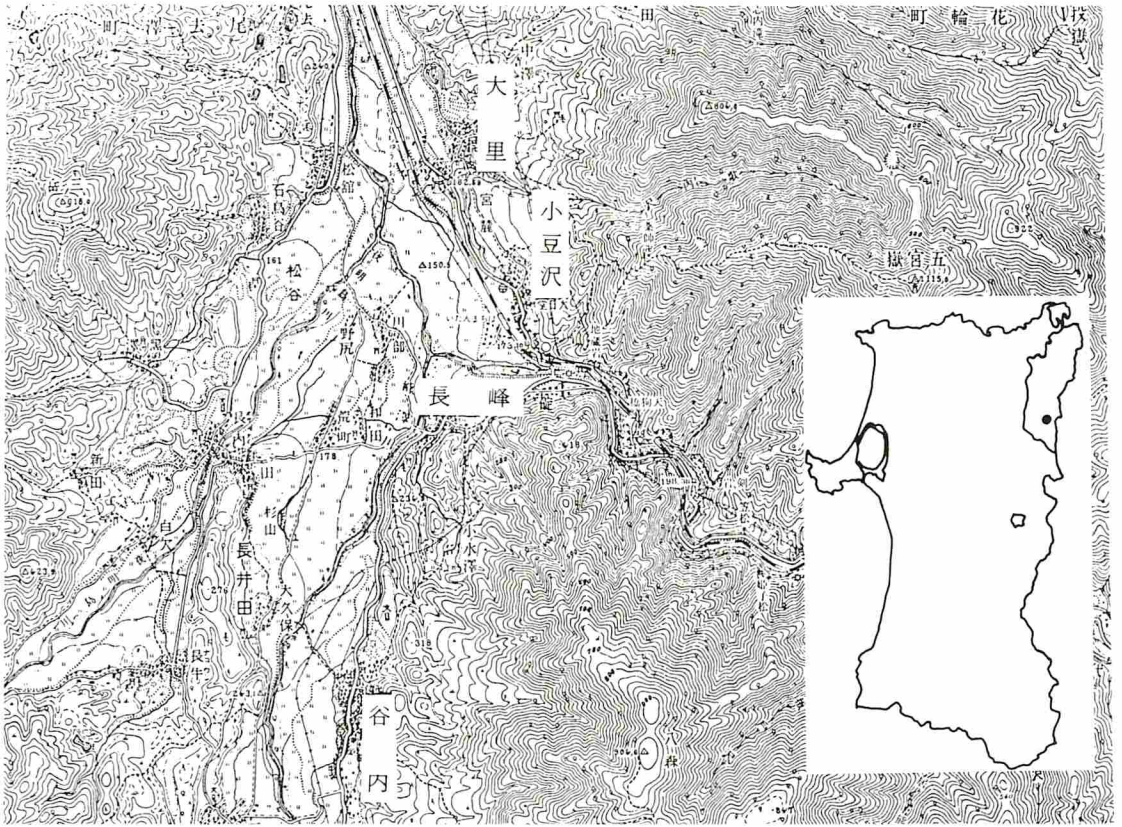
本調査の主眼は、追体験にあったといえよう。そして祭堂の全体をできるだけ時間の経過にそってながめてみようということにあった。能衆一人一人がどう動き、どんな位置を占めて祭堂にのぞむのかといったことがらを中心にしたのである。しかし、我々は、等質ではなく、また予備知識を得ることも充分ではなかったことから結局には精粗が認められることとなった。

第1回目の練習開始から本番までの盛り上がりをもり込められれば幸いなことと考えるが、これとて満足できないこと明白であろう。ただ、勝平展を進める上では、この上もないバックデータとなったし、展示構成の面に放いても「勝平得之の求めた世界」として1コーナーを占め、民俗（晴と曇のある生活）を描くことの意味をさぐることとなったのである。

なお、本報告は、小豆沢と大里部落を中心にし、日付けを合わせて並列する方法をとっている。また、文章の長短を埋めるために、写真を用いて調整した。後半は、資料として掲示した古文書が中心である。これらの古文書は、容易に見ることができなかつたが、これを機会に多くの方がたに利用されることを期待する。また、写真掲載を快諾された、所蔵者にはこの場をかりて謝意を表する（残りの別当家文書は次号にゆずることとした）。

なお、「勝平得之の作品と秋田」については、既に『展示報告・勝平得之の作品と秋田』（1977年3月発行）として公けになっており、展示にかかわる調査全体について触れているので、あわせて参照いただければ幸いである。また、主な参考文献としては「鹿角郡小豆澤大日堂の祭堂一正月二日の神事一」（『民俗学』5の2、本田安次・昭和8年2月）・「小豆澤大日堂の祭・補遺（『同』5の4、昭和8年4月）及び「秋田小豆沢大日堂の祭堂」（『おまつり』3、松平齊光、昭和16年11月）であった。

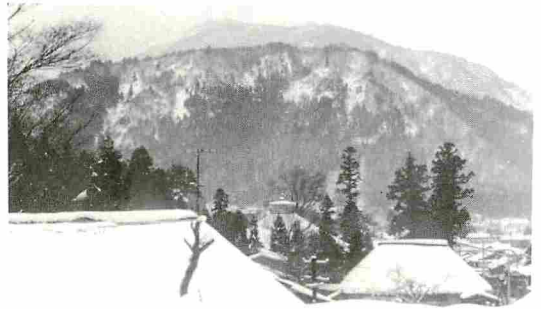
大日堂舞楽調査報告



大日堂舞楽奉納四部落位置図 (図1 国土地理院発行5万分の1地形図「田山」使用)



大日靈貴神社 (大日堂) 正面



平安神社 (別当家) より大日堂をのぞむ

—小豆沢—

〔12月30日〕

午後1時から3時まで別当家訪問。

別当・安部洋直氏より保存会員名簿や舞楽掲載誌などを見せていただいた。安部家は現在、平安神社を号するが、以前は寺院であったそうである。現在も約40戸程の御霊屋を神殿奥に有する。

以下は12月30日までの経過を示したものである。

12月2日大日堂舞楽保存会理事会

会長（安倍氏）の招集により、両国旅館に於て午後2時頃より夕7時頃まで。内容は、今年も舞楽を奉納したいという意向と1月2日午前8時に姥杉に集合の約束。なお、元は旧暦11月23日に、別当家より各部落宛奉納するよう要請があったといわれる。

12月8日小豆沢祭堂寄り

阿部富五郎筆頭理事の招集により、能衆の確認が行われる。各自の都合と宿の申し出、今年の集まり（けいこの日取り）など話しあわれる。平安神社内で午後7時頃から12時頃まで。（けいこ日）

12月18日御籠り（神社の年越し）

この日笛吹田、別当家より二重ねずつ御餅が神社に奉仕される。（けいこ日）

12月20日〆縄張り

自家でつくった左縄に、自家の間口に合わせて、7・5・3のいずれかの本数の御下がりをはぼ等間隔に下げ門前に張る。小豆沢では能衆の他、宿、天王さん、白山さん、山本徳太郎家、別当家である。

12月25日小豆沢けいこ日

12月26日小豆沢けいこ日

12月27日（長峰、大小籠神旗頭旗、鳥遍舞の頬面に入れる能衆の御守り6枚持ち帰り、公民館に奉安）

12月28日午後8時頃より小豆沢青年会のモミ押し練習。（けいこ日）

12月29日（谷内・大小籠神旗頭旗持帰り神明社に奉安）その他

- ①安倍氏宅蔵と思われる系図・棟札・その他古文書は、多忙の折柄か、拝見させてもらえず。
- ②「舞台元」一長峰に於て現存
- ③「山本徳太郎」一昭和24年大日堂焼失の折、神社復興に尽力、1月2日早朝権現舞の歩き筋に加わる。

—大里—

〔12月30日〕

八幡平駅発12時35分の花輪行バスにて、成田政雄氏宅に向かう。午後1時より3時半までお話をうかがう。

◎部落祭堂運営について

「大日堂縁起」には、大里部落を組織する役として籠屋が定められている。代々屋号として伝えられていたが、現在は大里を離れ湯瀬に住んでいるとのことである。昭和47年には大日堂舞楽保存会が発足し、大里の舞そのものも保存会を中心となされている。こうした保存会の動きは、昭和24年からの祭堂綴とあわせてみると一層明確になると思われる。すなわち、昭和27年には、祭堂は部落行事となっていて、昭和30年頃迄は、部落会長もしくは十三石の屋号をもつ大里氏が宿をつとめていたのである。昭和32年には、大里與一郎氏が宿を、当番（祭堂に関する会計・集会等の世話人）は部落会長・副会長があたっている。昭和37年からは、宿を公民館に移し、現在に至っている。公民館を宿とするようになったのは、宿をつとめる家が厳しい潔斎を要求されるのについて行けなくなったことと、家屋構造が変化し、舞の練習場でもあった土間がなくなってきたことと無縁ではない。昭和50年度の役員は、保存会長・浅石嘉七氏、副会長・浅石林一郎氏及び成田政雄氏それに部落会長の田中一三氏である。役員は世襲ではない。部落長は、部落十班に分れた中から、それぞれ任期2年の幹部を選び、その幹部同志互選により選任される。任期は1年である。交替時期・決算時期が12月であることから、また、部落会長が自動的に保存会役員となることから、部落の運営と祭堂の運営は切り離せないものとなっている。

昭和51年度の祭堂に関して、部落では、12月中旬に役員会が開かれ、その時に会計についての話し合いや能衆の人選が行われた。次のとおりである。

〔駒舞〕浅石福弥・浅石仁吉

〔鳥舞〕成田康信・浅石俊信・浅利直衛

〔工匠舞〕作山長四郎・大里道郎・成田康男・浅石康明

〔笛〕成田政雄・浅石繁雄

〔太鼓〕田中敬治

なお、大日堂祭堂当日迄の日程は以下のとおり毎年の慣例となっている。

12月23日 舞の練習開始

25日 練習

27日 駒下がり一駒形神社より神様をおろしてくる。

—小豆沢—

- ④「笛吹田」一笛吹きの世界家。  
現在、子息与七郎が吹き手となるが、それ以前は現保存会副会長畠山藤助氏が吹き手であった。舞楽奉納のため田地を頂戴し、それを糧とし、年々の役を務めた家筋。
- ⑤「神子舞」一天の神に捧げる舞。
- ⑥「神名手舞」一地神に捧げる舞。
- ⑦神子舞・神名手舞は、古くは、能衆29人が1人ずつ舞って納めたが、現在3人ずつとなり、小豆沢の場合は、祭堂頭と権現頭・尾の3人と他の5人が組となって舞う。
- ⑧財源（内訳）  
部落からは、少々出る（額）。理事を中心に祭堂が運営される。会計は天王さん（橋本氏）。会合・けいこ等の御神酒代・青年会等の人足代を含めて20万～30万円位の経費が必要。
- ⑨小豆沢・長峰は世襲多く、小豆沢は能衆以外幡持ちなど9人が青年会。
- ⑩大日堂終了後、各部落毎1月18日まで大小龍神幡を奉持。
- ⑪元は、モミ押しの青年は四部落から出ていたが、現在は40名程全員が小豆沢青年会会員。高校生以上30歳ぐらいまで。

<午後3時30分> 大日堂にて大抜

- 参加者 部落関係者3名  
祭堂関係者2名（頭・笛吹田）  
総代1名

3時50分には東詰所（右側）に6名参集

4時祝詞にて始まる。

4時20分終わり。御神酒を召上る。

5時30分散会。

<午後8時> 2回目のもみ押し練習

- 第一回目は28日
- 於・大日堂
- 開始まで御神酒を召上る。
- 昭和21・2年頃までは、各部落から出たが、不都合あり、今は小豆沢だけとなる。
- 午後8時15分練習開始。先頭は小田島義幸君（S241・18生）
- 8時20分頃先輩（畠山市太郎29歳・阿部二三夫30歳）指導に来る。  
一度終了後、先輩の注意と指導。  
二度目は高校生を20名程中心に再開。他の人は見学。
- 8時30分二度目終わる。

—大里—

29日 練習—今年は30日延期。

1月1日 旗作り一朝8時から9時頃迄集合し、衣裳等道具の準備をする。午後より衣裳を着て、舞う。

2日 午前3時半より4時迄に公民館集合。

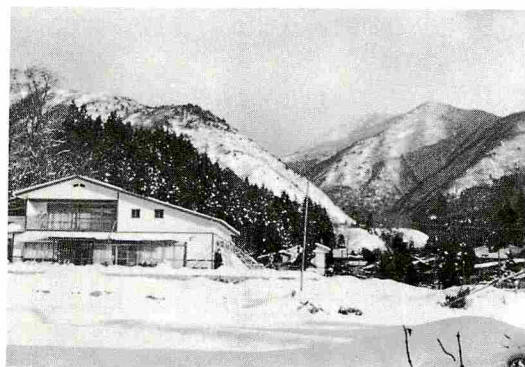
3日 幕納め

このほか、7月7日には駒形神社参道の草払いが行われる。部落全戸が参加することとなっているが、田中家だけは参加できないとのことである。その時、馬の鳴声を聞くと災難があるので、参加者全員さわぎながら山に入るとのことである。

午後7時より同9時半頃迄、舞の練習を見学。衣裳を着けずに練習。終了後、能衆・世話役全員で簡単な煮物を食べ、酒を飲む。



上村より川部をのぞむ



上村概観

—小豆沢—

先輩の注意あり。ゴム長靴だから音は高く聞えるが、当日はワラゲツだから音はしなくなる。もっと力強く動くように。へっぴり腰で、モミ俵をかつぐ腰ではない。他人に関係なく動いている。先輩の御手本のあと。

- 8時45分全員で再開（3度目）。途中消防団員6人見学指導。
- 8時55分終了  
消防団員の1人が先輩の注意と似たような注意をする。  
青年会長山本君の本番時の服装等の注意のあと、御神酒を頂き、9時10分頃散会。

〔12月31日〕 権現様の年越し・メ縄張り

<午前6時40分> 能衆等13人中12人詰所に集まり御神酒をあがる。

<7時25分> 天王さんの言葉で年越し作業に取りかかる。高張提灯(2)、「五の宮神社」銘旗・錦旗・御立傘・大鼓・御神箱を引き出す。

<7時35分> 年越し場所(別当家)に向けて列を組み出発。

<7時45分> 別当家着。  
神殿にオジ(向って右)オバ(左)両権現様を奉安し、別当よりアイサツ参拝の後、各自、拍手を打ち参拝。

<7時55分> 別当家より御神酒とミカン、白菜の漬物が出される。

<8時10分> メ縄張り(大日堂)。  
新しいメ縄張りのため、小豆沢6班7班各戸最底1人の「人足がかかり」集合。各戸藁2束持ち寄る(部落会の決定)。20名ほど集合の内、3名女性。堂内に張るメ縄は10年程前のもので長さは20m位、太さ50cm。正面のメ縄は25年ものもの。

<8時15分> 右入口付近で女性を中心に藁シベ取り作業始まる。

<8時25分> 堂内より幟を外に出し、取り付け作業始まる。

<9時> 堂内大柱正面左に鉄製フックと古いメ縄を取り付け、新しい方をフックにかけ縄作り始まる。大鳥居近くで幟取り付け、正面メ縄降ろされ、作り替え作業始まる。

<10時> 13人(内1人女性)。堂外の腰に6人(内2人女性)、幟取付、雪除せ10人。姥杉に御幣取り付け。

—大里—



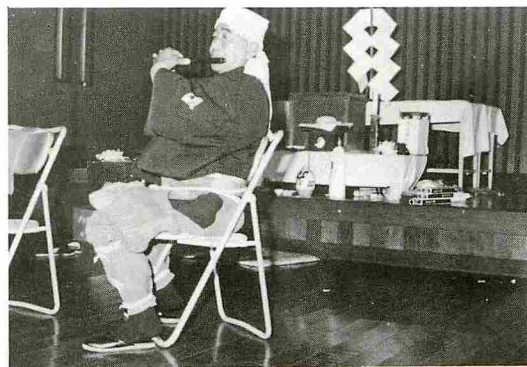
稲荷神社と公民館

〔12月31日〕

八幡平駅発12時35分の花輪行バスにて成田氏宅に向かう。成田氏は、現在笛吹きであり、能衆の舞についても指導的立場にある。成田氏は笛吹きとしては一代であるが、代々駒形神社別当と言われているそうである。午後より3時までお話をうかがう。

◎精進・潔斎について

現在は昔ほど厳しい精進・潔斎は行われていない。縁起によると15日間ということであるが、現在では12月23日の練習開始より指導しているということである。ただし、昔どおり、人との交流を断つようでは不可能な場合も出てくるので、具体的には四足獣、ネギ、卵などをさける程度である。来客に対しては、成田氏宅では、お茶などの接待も出来ないし、公民館においても、能衆には燗酒を出す、客には冷酒というように、その場で煮たものや焼いたものは一切食べさせないようにするなどの厳しさも残っている。



笛吹き・成田氏

—小豆沢—

<11時> 正面のノ縄できる（小田島安吉氏他50～60歳位の4、5人先達）。

「大日さん」の御札販売所組み立てはじまる（右側狛犬前）。

正面、堂内ともにノ縄張り完了。

販売所完成。

ゴミ焼き終わる（元は、余ったワラは各自持ち帰って処分したが、今日は、左空地にて焼却、残りは希望者が持ち帰る）。

<12時10分> 部落会長・別当よりあいさつの後、御神酒を頂戴し散会。

以下は、合い間に聞き得たことからである。

- ①「大日堂9間四方」とはいうが、9つの間取りの内中央は8尺なので実際は11間四方ということである。
- ②昭和26年14万円出来た。
- ③中央4本の大柱には木挽きノコで、中心までノコ目を入れて、ヒビ割れが多くなるのを防いでいる。
- ④焼失前は、4・5年に1回ずつ、片側屋根をふきかえていた。又、内御殿も元は9間四方の内であった。
- ⑤能衆の持ち場は、小豆沢（前）、谷内（後）が右、大里・長峰が左になっている。
- ⑥「相馬大作」一元の街道は、大日堂境内を通る形になっていて、壁板には多くの落書があった。その中に、大正末頃発見した相馬大作の記したと思われるものがあった。内容は、下戸米秀之進、火急の用事があって津軽へ行くという内容。津軽公を討ちに行く途中のものと思われる。（山本氏談）
- ⑦大日如来は牛に乗った御姿である。

〔1月1日〕 古文書調査（長峰部落・阿部甚之助氏宅を訪れる。多少の聞き書きをする。）

- 祭堂以外舞を舞うことは禁物。現在のようにあちこちと招かれて舞うことは考えられなかった。夏に舞ったりすると、雪が降ってケガチになると言われたものだ。
- 婿取りの場合、はじめに3年程、嫁の方が先に婿方の家に入ったものだ。
- 元は、大日堂で奉納される舞は午前5時頃から午後5時半頃までかかったものだ。現在の舞は時間的に簡略化されている。
- 長峰近辺のマチー尾去沢マチ・花輪マチ・小坂マチ・毛馬内マチなどが有名。

—大里—



公民館内での練習風景



公民館内での練習風景一駒舞

〔1月1日〕

午前9時より衣裳及び旗などの準備があるとのことで公民館に行く。衣裳は、能衆がおのおの自分で洗濯しており、この日は主に肩に付けるケラや駒の組み立て、修理に時間をさく、それに必要な白紙、麻糸などは前日、成田氏が買い求めておいたものである。

○各舞と衣裳

—駒舞—

雌・雄の2体があるが、衣裳・道具の違いはない。胴と頭は別々であり、神前の左右に置かれていた。組み立ては次のとおりされる。まず、頭のみぞに、たて髪をあらわすのか、麻布を束ねていれる。次に、頭を胴の先端部一首に当る部分—に取り付ける。轡は、口金の部分で

—小豆沢—

◦若水汲み一戦前までであった。旧正月早朝、朝日が登る頃湯ゴリ取って、誰も起きないうち、自家の井戸へ行って汲む。この時鏡餅一枚を半分に切り、一方を汲む桶に、他を井戸の中へ投げ入れる。桶は正月マチに行き行って買う。汲み終えた桶は、カグザの中の前に伏せた臼の上に置く。

<午後3時30分> 権現頭、御神酒を手に実家へ。羽織袴につま皮下駄履き。45分実家に着く。

<3時50分> 笛吹1人、別当家着。和服にマント姿。

<4時15分> 権現頭とその父親着（既に6人参集）。

<4時18分> 天王さん着。

<4時19分> 天王さんのあいさつ。

<4時20分> 権現頭ほか能衆2人別当に年始あいさつのため、奥の部屋へ行く。9人参集。

<4時25分> 能衆2人到着。神殿に額づき拍手を打ち皆にあいさつ。

<4時30分> 最後の2人着く。あいさつの後、天王さんの言葉で各自最後の準備にとりかかる。頭旗のとりつけ、権現様の紙幣化粧、御立傘点検、太鼓点検、頭旗点検と続く。

この間天王さんの「さつ幣」作り。

別頭家を出した紅白の餅を菱形に12ケずつ切り（うるう年は13ケだが今は12ケとなっている由）、ワラットに入れる。2束のワラットの下に、サツ幣を4本ずつ3段重ね、その上を上から7・5・3回にしめる。又、耳も上から下へ小さくする。幡下ろしの日にこの餅を食べる。

<4時50分> 別当家よりハタハタのスシとコンニャク、チクワの煮メ、ミカン、御酒がさし出される。

<5時> 太鼓をしめ直す。（取材者・カメラマン2名）。

<5時6分> 音合わせ（2分で終了）

<5時9分> 最後の練習開始

①神子舞

②同

③神名手舞（①の組）

④同（②の組）

⑤笛合わせ

<5時15分> 祭堂頭拍手を打ち、権現様を下ろし中央に運ぶ。権現様を中に能衆まわりから拍手を打つ。権現舞始まる。

<5時23分> ゴヘイの位置かわる（頭尾逆）。

<5時24分> 元の位置に戻る。

<5時25分> 権現頭・権現様より抜け、祭堂頭に手渡し前掛け、左右脇掛け、後掛けを権現様の頭に

—大里—

ある銜を馬の口にはませ、麻縄で口の中をとおし、胴の先端の穴に結びつける。金具の両端に桃・赤水・緑・黄の色布を5本取り付けて手綱にする。十字轡である。頭を胴に取り付けると、あらかじめ公民館の天井にさげていたローブを利用して胴を120cmぐらいの高さに固定し、能衆が胴部を体にあてて具合をみる。そのあと、胴のまわりに白布をめぐらし、組み立てをおわる。頭は、桐の木でできており、口の部分が、白と赤で色付けされている。舞手の衣裳は、工匠舞の能衆と同様、直垂に指貫、足には脚絆といういでたちであるが、直垂の下に小袖を合わせ着している。肩にはシデをつけたケラ、頭にもシデをつけたものをかぶる。

—工匠舞—

工匠舞は、パチコ舞・パットウ舞と呼ばれている。能衆は4人であり、それぞれ天王の名をもらったところから四天王とも呼ばれる。着方は、まず上衣を着てから下を着る。下の指貫をはく時は指貫の前後について紐のうち、前についたものは腰をめぐらして前に、後のものはそのまま前に結ぶ。次に脚絆を足につける。頭には黒い烏帽子をかぶり、赤い紐で結ぶ。烏帽子の左右にはシデがつけられている。腰には刀をさし、紡垂状に紙を木にまきつけたシデをはさみ込む。舞う時にはシデを両手に持つ。四人の舞手のうち、いちばん右端の舞手をトウベンあるいはオヤバチと呼ぶ。

—鳥舞—

舞手は童子三人。駒舞、工匠舞と同様の直垂を着る。かぶりものは、向いつばつき帽子の上に、鶏を形どったものをのせており、一人は雄鶏、二人は雌鶏をあらわしている。それぞれ横に、紋を書いており、大日靈貴神社、吉祥院、それに大という文字の紋である。

衣裳の修理について、成田氏の祭堂綴には次のような記載があった。

◦昭和28年

衣裳新調、川口迄ノ旅ヒ 壱千円

麻布拾四反分（反当750円） 壱万五百円

十式反分麻布咄賃 壱千貳百円

麻布ノ染料 六千百参拾円

衣裳ノ仕立 貳千円

この時は、安保忠孝氏より、壱万円の寄付があったと記されており、仕立ては成田氏の妹・キエさんがしており、工匠舞・駒舞の衣裳を新調したとのことである。現在の工匠舞・駒舞の衣裳は、昭和28年以後のものであり、鳥舞は5、6年前に新調したとのことである。

—小豆沢—

載せる。全員で拍手を打ち神殿に納める。

<5時27分> 田楽舞始まる。祭堂頭全員（4人）にササラを神殿より下ろし、手渡す。

<5時30分> 祭堂頭（鼓持）ササラを集めて神棚に納める。田楽舞終了。

<5時32分> 祭堂頭・笛吹・権現頭の3人、権現舞の舞い方をめぐって話し合い、権現頭だけで再練習（1分ぐらいで終わる）。

<5時35分> 御神酒をまわし、料理もまわる。

<5時40分> 飲みながら、天王さんから、感謝状発行の件についての意向伝え、諸々のことを話し合う。

<7時過ぎ> 散会。

旅館へ天王さん訪ねて来られる。多くの御教示を得る。



最後の練習のため集まる



権現舞の練習

—大里—

竜神旗・錦旗・駒形神社旗をそろえ、ほぼ衣裳が整ったのは午前12時半頃であり、能衆は公民館にて全員そろって食事をとる。この時、食事等の世話は、立ち回りと呼ぶ女の三人があたる。舞を始めたのは2時過ぎであった。

<2時3分> 駒舞の浅石仁吉氏、神前にて酒盃に酒を入れる。一杯を飲み、駒舞の浅石福弥氏に手渡す。次に笛吹き・成田氏、同じく田中氏に渡す。更に太鼓、工匠舞のとうべん、その他の三能衆と盃がまわる。最後に浅石仁吉氏が盃を神前に返す。

<2時5分> 神子舞始まる。能衆1人1人が右手に鈴、左手にシデを持ち、舞う。鈴、シデは袖の端で包んで持っている。舞の順は、駒舞・浅石仁吉氏、駒舞・浅石福弥氏、鳥舞・雄鳥、鳥舞雌鳥、鳥舞雌鳥、工匠舞とうべん、工匠舞各1人ずつである。鈴、シデは、前の舞手が神前にて礼の後、後向きになり、次の舞手に手渡す。

<2時17分> かなで舞。能衆1人1人が舞う。右手にシデだけを持つ。舞の順序は神子舞と同様である。2時27分終了。引き続いて駒舞の準備をする。舞手は上の直垂を脱ぎ、白い小袖になる。工匠舞2人ずつが補助し、駒をつける。肩にはケラをつけて置き、肩からたすき懸けにする。（赤と水色）。

<2時38分> 駒舞が始まる。2人舞に続いて1人舞。1人舞の間、あとの1体は駒の頭をあげ、工匠舞手2人に手綱を持たせひかえる。再び2人舞。次に前にひかえていた駒が1人舞のあと最後の2人舞となる。この時の舞は、日の丸の扇子と駒の後に付けていた駒形神社の補符を持ち舞う。

<3時5分> 鳥舞始まる。右手に各々扇子を持つ。雄鳥のみ左手に鈴を持つ。

<3時20分> 工匠舞始まる。とうべんが神前にて礼ののち、刀を抜き刃先を前・左・右・左・右・前に向け、再び神前にて礼。シデは袖の先で包み舞う。3時45分終了。

○ 笛と太鼓

笛吹き 成田氏から聞いたところによると、昔の笛は竹製であつたらしいが、現在の笛は、朴の木を熊皮で包んだものようである。2本あって、出る音の高さの違いにより、男笛と女笛に分けている。成田氏の吹いているのは、低い音の出る男笛である。成田氏の笛吹きとしてのキャリアは40年近いとのことである。主に浅石徳太郎氏、菊地長吉氏より指導を受けたそうである。太鼓は、熊皮をはり、バチ1本で叩く。

〔1月2日〕



—小豆沢—

- 大日堂初詣客でにぎわう。
- 舞台上では、笹飴売りのおばさんプラスチック袋に5本ずつ詰める作業。1袋100円。
- おこもりの婆さん、内殿左の部屋でストーブのまわりに6人仮眠中。

別当家には能衆8人集まっている。後、高張・銘旗・太鼓・錦旗・御幣・権現様など、宿へ向かう。宿に着くと裏にまわり縁側から全員入る。宿では夕方8時頃から、娘さん、嫁さん、家から出た婆さんの4人で料理仕度をした。能衆が宿を出たあと、次の朝までは、はいたり、ふいたりしないことになっている。

◎宿のこと・阿部賢三郎氏宅（御母堂よりの聞き書き）

この阿部氏は、先代まで代々権現頭をつとめた能衆であったが、現在では、斎藤末治氏につとめてもらっている。阿部家の先祖は「一ノ丞」と称したが、いつの時代かは明らかではない。安倍氏（大日靈貴神社別当）の「カリコ」にはいり、分家して阿部姓をもらったといわれる。

御母堂が嫁ぐ時、実家の者達は、能衆のしきたりになじめるかどうか心配したそうである。その理由は、能衆の家では12月1日から門にしめ縄をはり、精進潔斎にはいる。能人は自分の妻や子どもと同室せず身を清める。火鉢やその他炊事用具を準備し、自炊する。他人の手のかけた食物は一切食してはならない。また、他の家を訪れた際には、火を通したものは口に入れる事は禁じられた。またこの種の行事にはつきものであるが、女人禁制で女性が手を加えた食物を含んではならず、さらには自分の妻にふれることさえ慎まなければならなかった。

このような禁忌は、神に仕え神の権化となる能衆の厳しい掟であるが、現在においては、守る事は容易ではない。現在守られている事といえば、しめ縄を張ることぐらいといわれる。

1月2日未明の準備は、家のものと親戚の手伝いで行うとのこと。献立については、四足獣は禁じられ魚貝類・野菜類が主流である。その膳を運ぶ者は、男子の手により、阿部家の親類の若者が行う。この者を「イツコ」と呼ぶ。

この食事の経費は、阿部家でもつらしい。今回宿を申し出た理由は、新築の厄払いであり、その他いろいろな意味で阿部家では、この度の舞を期待しているらしかった。

この他、宿の申し出の理由としては、病気の全快祝いのためもあるが、もし宿のなり手がいない場合、各能

—大里—

- <午前2時50分> 公民館に着く。
- <3時23分> 成田氏、家を出る。一緒に上村の浅石福弥氏宅へ向かう。
- <3時32分> 浅石氏、上村のおおすじ（大清水）にて水ごり後、家に帰り湯ごりをとるとのことであった。
- <4時> 集合開始
- <4時52分> これまで衣裳を着る。かなで舞始める。舞の順は前日と同じ。
- <5時2分> 神子舞始める。
- <5時12分> 舞終了。駒舞手2人が神前で御神酒をいただく。その後、駒を身に付ける。
- <5時18分> 駒舞始める。
- <5時37分> 舞終了。
- <5時42分> 鳥舞始める。鶏らしくということで、顔におしろい、口と耳たぶに口紅を塗る。駒舞の胴体を神前に返す。胴体2体とも一緒にコモで包む。
- <5時54分> 終了
- <5時55分> 工匠舞始める。
- <6時2分> 舞終了後、御神酒を前日の順序で飲む。行列を整え、公民館を出る。行列は、提灯が先頭、次に大龍神旗、小龍神旗、白い駒形神社旗、錦旗、四角（以前は十三石・大里氏が持っていたが、当日は、浅石林一郎氏が持って行く）、太鼓と太鼓を叩く能衆、笛吹き、駒舞、鳥舞、工匠舞の能衆が続く。
- <6時25分> 公民館を出て（提灯1、青い駒形神社旗、籠屋のもつ四角は公民館に残る）、上村の駒形神社参道入口にあたる田中商店の前に到着。能衆全員で神子舞を舞う。後、工匠舞を舞う。提灯、龍神旗は後方でひかえる。田中商店では御神酒を振る舞う。
- <6時34分> 来た道を引き返す。山頂のみえるところで拝礼。
- <6時37分> 以前、籠屋の住んでいた家の前で神子舞・神名手舞を舞う。その家では酒を振る舞う。その家の庭にはお堂があるとのことである。
- <6時45分> 川原村の笛吹き、成田氏の玄関前で全員神子舞・神名手舞を舞う。公民館に残っていた提灯1、青い駒形神社旗、籠屋の持つ四角、更に御幣（本来は駒形神社別当が持

—小豆沢—

衆のいづれかが引き受ける仕組みになっている。

今回の宿である阿部家には能衆が勢揃している。上座中央に権現頭、尾ッポタタキ（鈴子舞）、権現頭に向かった右列に舞衆6人、左列に笛、太鼓、鼓の6人下座に舞台守が座す。

- 1 権現頭
- 2 尾ッポタタキ
- 3～8 能衆
- 9 舞台守
- 10～13太鼓
- 14～15笛吹田

各人の前には膳が配されており、暫時酒宴となる。料理するのは女性、運ぶ者は男性である。献立は四足獣の肉類はなく、たこ・いかの刺身、なまこ、エビフライ、なます、なめこおろし、たらとはるさめの吸物である。神棚には、みかん・菓子・日本酒一升・獅子頭が供えられている。

<2時25分> 酒宴も終りを告げ、若い獅子頭を先頭に水垢離を始める。かつては、湧き水の出る泉で水垢離をしたらしいが、現在は宿の庭内の洗場で行う。また水垢離は若者5人、その他は湯垢離である。

水・湯で身を潔めた後、装束を身につける。この際肌着も新しいものに替える。

- <2時25分> 権現頭水ゴリをとる。
- <2時30分> 若い能衆3人水ゴリをとる。
- <2時40分> 御膳をかたづけ、全員身仕度にかかる。
- <3時30分> 身仕度を整えながら、雨天のためワラグツをつけないう、皆に連絡あり。
- <3時40分> 天王さん、若い能衆に袖のかぶり方が逆との指示がある。正しくは左袖を先に。
- <4時5分> 御神酒が皆にまわる。最後天王さん。その後、天王さんから宿の親代表に返盃。残った御神酒は神殿に戻す。御神酒と共に、塩の盆とエビ・ニボシの入った盆が回る。それぞれ、好みのものに手をつけ、口に含み、続いて御神酒を頂く。

これが一通り終るといよいよ舞である。まず神子舞、神名手舞、権現舞と続く。田楽舞は行なわれなかった。聞くところによると、舞を一通り全部舞うことを「オク」、省略することを「ワセ」と呼ぶとのこと、今回ののはワセであった。

—大里—

つものであるということであるが、保存会長の浅石嘉七氏がかわりをつとめ、黒い直垂を着ている）、コモで包んだ駒の胴体が村を回った行列の前に着き大日堂へと向かう。

行列は、提灯2、青い駒形神社旗、籠屋の持つ四角、御幣、駒形胴体、大龍神旗、小龍神旗、白い駒形神社旗、錦旗、十三石の持つ四角、太鼓、太鼓を叩く能衆、笛吹き、駒舞鳥舞、工匠舞の能衆で構成されている。更に後に、荷物を持つ人達が続く。こうした荷物を持つ人達の他、龍神旗等各旗を持つ若い人達は人足として雇われた人であり、ほぼ例年通りの顔ぶれである。能衆達は、舞衣裳のまま大日堂へ向かうならわしであり、例年であれば、ワラグツをはいていくのであるが、今年は雨のため長靴をはいている。

<7時2分> 県道で五ノ宮山頂に向けて、笛・太鼓と共に礼。

<7時10分> 白山神社に入る道に到る。ここで籠屋の持つ青い駒形神社旗、御幣、コモで包んだ駒の胴体は別れて県道を進み、あとの龍神旗は能衆等と共に白山神社へ向かう道を進む。

<7時15分> 白山神社下の畑（西の圃地）に到着。小豆沢部落の能衆を待つ。

<午前12時45分> 大日堂から公民館に到着。神子舞・神名手舞を駒舞手・鳥舞手・工匠無手の順で行う。後、駒舞・鳥舞・工匠舞を舞う。1時終了。各人衣裳を脱ぎ、公民館内に干す。

<午後1時15分> 酒宴始まる。



駒舞の背

—小豆沢—

—大里—

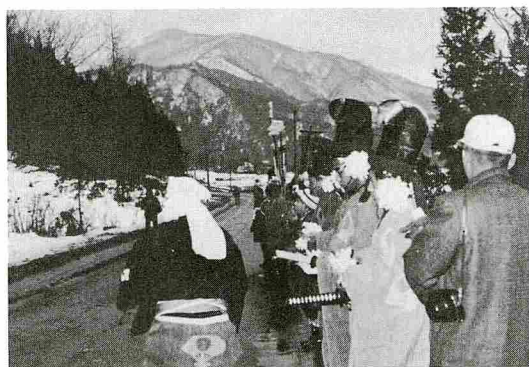
- <4時5分> 笛を吹き始める。
  - <4時7分> 笛終わる。蛍光灯を消す。
  - <4時8分> 神子舞・神名手舞の順で舞う。
  - <4時17分> 祭堂頭、権現様を下ろし、権現頭が権現様に入る。権現舞が始まると、宿の女達10円玉を権現様目がけて投げつけ、拍手をうち拝む。
  - <4時25分> 宿を出る。天王さん帰宅。
  - <4時30分> 山本家着。権現舞納める。家族の投げ銭。
  - <4時46分> 終わる。権現頭、山本家の皆に向い「みなさん、どうもあけまして、おめでとうございます。今年もよろしく」とあいさつ。その後用意された御膳に向い、御神酒をあがる。
  - <5時14分> 山本家を出発。
  - <5時18分> 別当家着。神子舞・神名手舞・権現舞の順で奉納。人足9人青年会は、右側頭部に「五色」というシデをさし、白ヒモのワラジを腰につけて待つ。
  - <5時30分> 権現舞終わる。若い者に年寄りのあいさつ。続いて田楽舞奉納。
  - <5時41分> 終わる。頭旗3人（大龍神2人・小龍神1人）他に諸注意とあいさつ。各自若い人（青年会）に年頭のあいさつ。
  - <5時45分> 別当家を立つ。ここから本列になるよう。頭旗・高張・大鼓・笛・銘旗・錦旗・高張・権現様・御立傘の順。
  - <5時50分> 笛吹田着。玄関から上がり端まで1枚のムシロを引き延べてある。  
高張のローソクを消し、頭旗もそのまま外に置いておく。笛吹田で出す料理は「長漬菜」ときまっている。大根のしばりじょうゆで食す。
  - <6時42分> 発つ。（6時30分からのテレビに大日堂舞楽が放映されたので、皆テレビの前にあつまり、しばし、見入ったのである。）
  - <6時50分> 八坂神社（天王さん宮司を務める）着。天王さんの所で出す料理は田楽豆腐ときまっているが、現在では田楽にできるような豆腐がないので、自前の料理となっているとのこと。
  - <7時> 出発。白山さんへ向う。
  - <7時1分> 白山家着。権現舞。
- ◎白山家のこと（齊藤安三氏宅）。小豆沢80番地の小高い丘の中腹に位置する齊藤家を訪ねる。齊藤家先祖は加賀の国の出身といわれ、年代は不明であるが以前



工 匠 舞



鳥 舞



県道より五の宮を拝す

## 大日堂舞楽調査報告

島流しに合い、津軽に流され、そこから現在地に居住地に居住するにいたったと伝えられる。ただ、火災のため、代々伝えられてきた古文書・武具などすべて焼失したため、確かな由来は不明である。

正月二日大日靈貴神社に舞を奉納する前に、能衆一行は数軒の家を巡るのだが、途中斎藤家にも立ち寄る同家の立地場所は、遠望のきく高台にあり、大里部落の能衆と落ち合う西の囲地（カクチ）を見渡することができる。昔から、小豆沢部落能衆たちが同家で休息することになっている。その根拠は不明である。

同家が白山と呼称されるのは、屋敷内に白山社が祀られているためといわれる。

- <7時11分> 終わる。
- <7時14分> 大里部落、西の囲地に着く。(庄内同行)。
- <7時30分> 白山さんから小豆沢部落西の囲地を見下ろしながら降りてきて、大里部落と対面す。小豆沢の笛、五の宮山に向い笛を吹く。次いで皆に向って吹いた後、権現舞。工匠舞・駒舞を略して踊る。
- <7時46分> 終わった後あいさつをかわし、双方よりミカンや御神酒のさし入れ。
- <7時50分> 西の囲地を出発、別当家の屋敷地内を通り大日堂へ向う。
- <8時頃> 大日堂着。前後して四部落参集す。



県道を行く龍神旗

### 大日堂にて

- <8時32分> モミ押し。
- <8時40分> 神子舞。
  - 長峰①3人博士までの3人
  - ②4～6人博士までが1組
  - 大里③駒舞2人
  - ④鳥舞3人
  - ⑤工匠舞の4人
  - 谷内⑥金剛界大日以下2人の3人
  - ⑦胎蔵界大日以下2人の3人
  - 小豆沢⑧権現頭・尾、以下1人の3人
  - ⑨祭堂頭以下4人

- 本舞 ①権現舞 ⑤五大尊舞  
②駒舞 ⑥工匠舞  
③鳥遍舞 ⑦田楽舞  
④鳥舞

11時19分終わる。大・小行持の式のあと、  
11時30分表彰式が舞台で行なわれる。

表彰者 浅石嘉七・畠山藤助・阿部甚之助・阿部雄治・安倍

感謝状 若泉福治・佐藤隆藏

12時終了各部落へ帰る。

神名手舞—上記の順でくり返す。



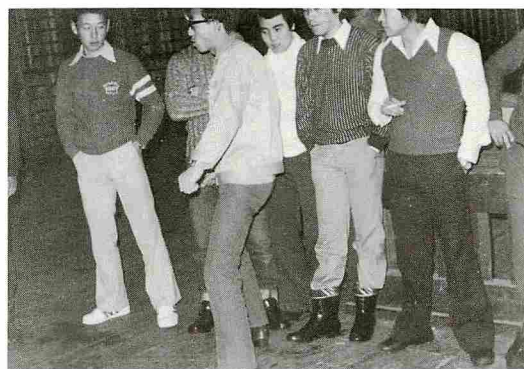
12・30 大祓の後の懇談



夜は青年会のモミ押し練習



大祓に集った人々



練習には先輩の注意もある



12・31 各戸よりワラや縄を持ち寄る

大日堂舞楽調査報告



縄を持ってくる人も



ていねいに作る



メ縄作り



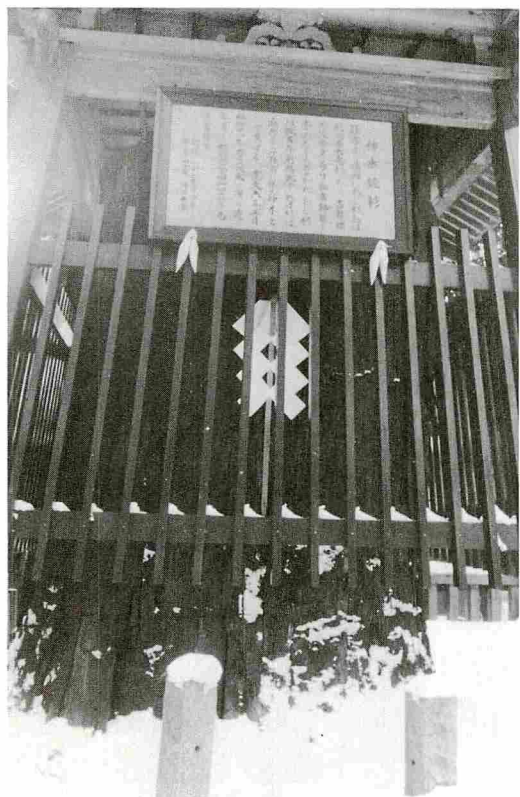
じっくりと



堂外では雪除けする人も



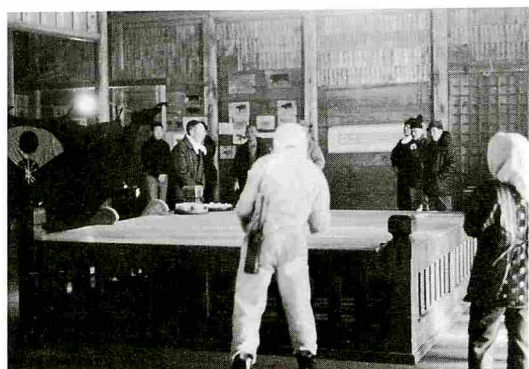
女性もまじって



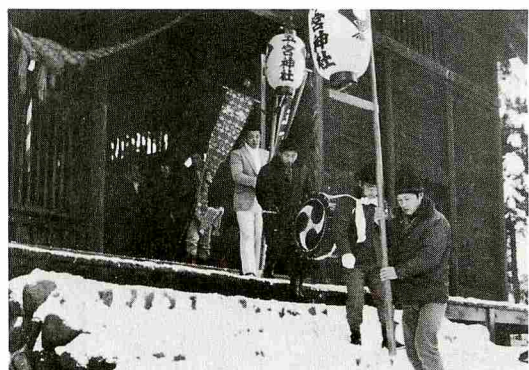
姥杉の化粧も終わる



新しい七・五・三縄も張られた



しめくくりは部落長のあいさつで

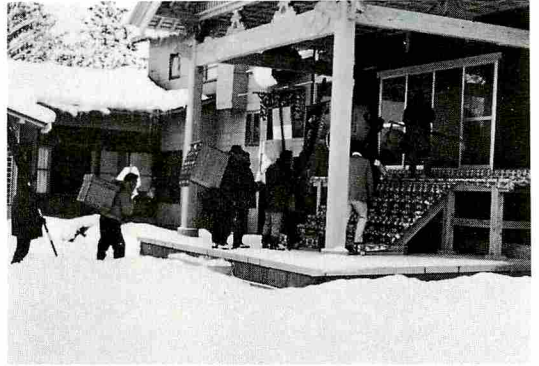


12・31 早朝の権現様の年越し準備

大日堂舞楽調査報告



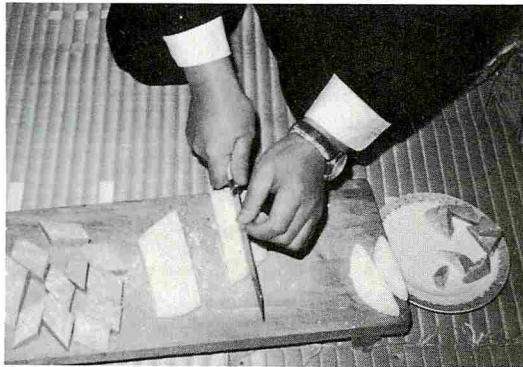
大日堂を出る



別当家に着く



いろいろな準備をする



天王さんのさつ幣作りは紅白の餅切りから



整った神前にて



さつ幣作り



1・1午後3時半  
能衆の集合・年  
始あいさつと最後の  
調整





神子舞の練習



権現様の化粧



権現様には常に拍子と礼を



田楽舞の練習

権現舞の練習



田楽舞の練習

大日堂舞楽調査報告



権現様をはずしての練習



衣裳をつける  
前の水ゴリ



1・2 宿に集合



1・2 宿の接待

衣裳をつける

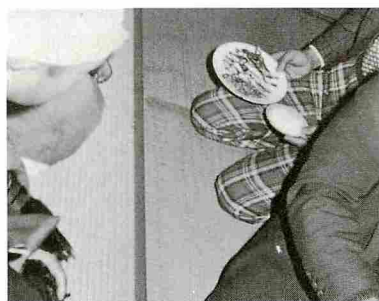




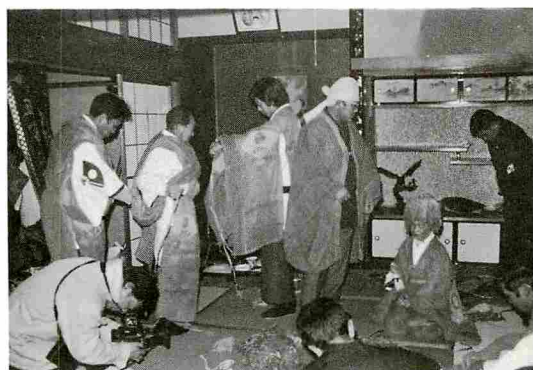
衣裳をつける



宿からのふるまいは古式どおり



焼魚・小エビ  
と塩をもって



料理はかたづけられ衣裳をつける



宿での権現舞

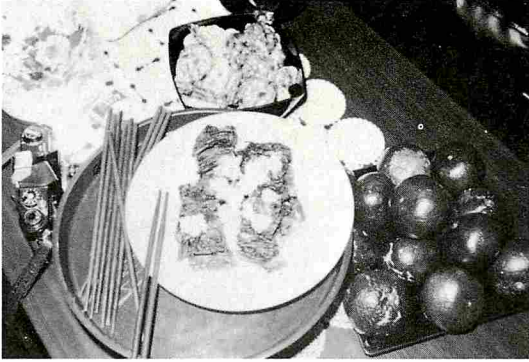


衣裳も着おわって

最初の立ち寄り  
先・山本家を出  
る



大日堂舞楽調査報告



二番目の立ち寄り先・笛吹田の食事には  
長漬菜がつきもの



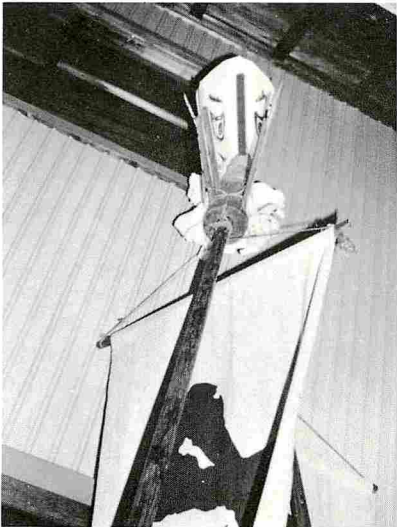
笛吹田を出る人足の青年会員



笛吹田より天王さんへ向う



天王さんでの食事は田楽豆腐がつきもの



龍神旗のし  
くみ



天王さんから白山さんへ向う。白山さん  
からの西の囲地をのぞむ



大里の能衆も県道をそれて西の囀地へ



あいさつが済むと五の宮山に向って笛を吹く



西の囀地への行列



西の囀地での権現舞



西の囀地でおちあうとまずあいさつ



別当家をさして西の囀地を出る

大日堂舞楽調査報告



大日堂の姥杉前に集まる



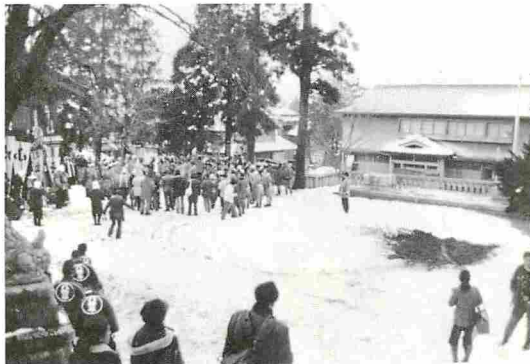
集合すると堂正面に立ち、五の宮に向かって笛を吹く



長峰・谷内からも集まる



大・小行事のあと、青年の晴れ舞台・モミ押し



集合終る



各部落の旗上げが始まる

太田和夫・庄内昭男・嶋田忠一

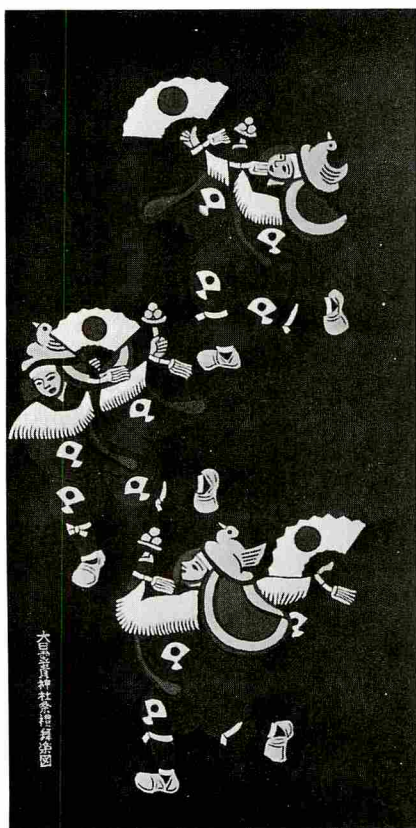


五の宮山参道  
一の鳥居



八幡平の門松  
は笹竹と松の  
小枝

大日靈貴神社舞楽図八部作（勝平得之）



鳥舞・昭和18年

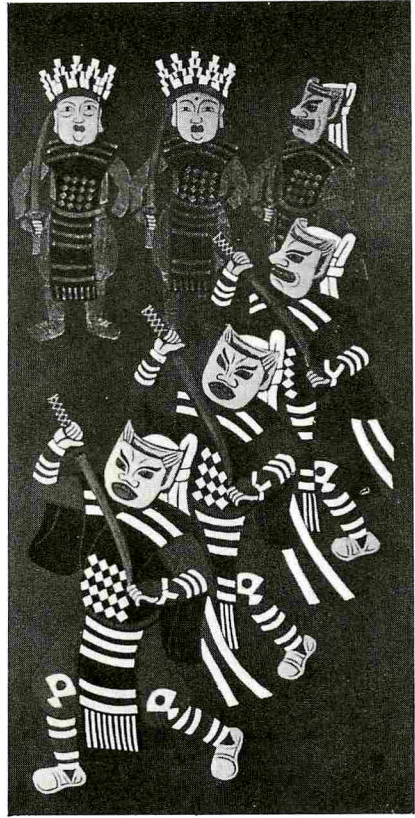


駒舞・昭和18年

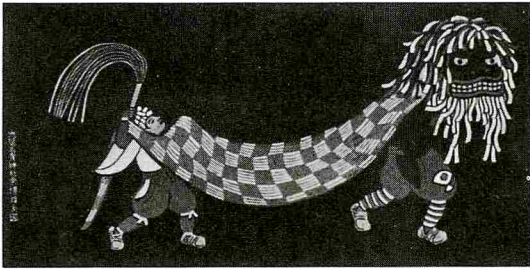
大日堂舞楽調査報告



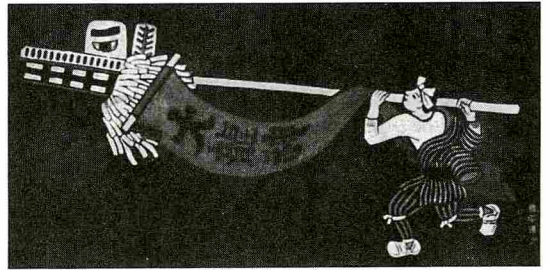
烏遍舞・昭和19年



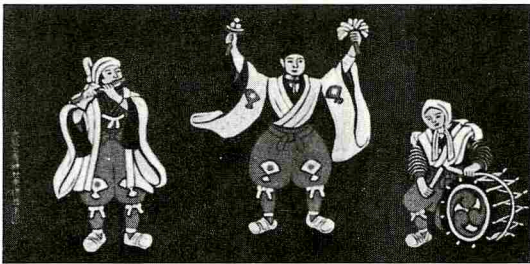
五大尊舞・昭和19年



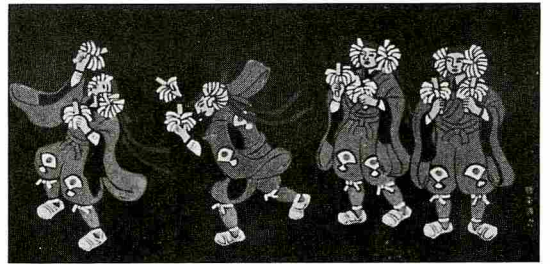
権現舞・昭和23年



御常楽・昭和23年



神子舞・昭和24年



工匠舞・昭和24年



資料

資料Ⅰ 大日堂舞楽保存会会員名簿

番号	氏名	職業	年令	備考
1	山本徳太郎	農業	71	神社総代
2	畠山 藤助	〃	70	〃 ・副会長
3	斎藤 延吉	〃	49	・理事、同、部落会長
4	橋本 運吉	教員	47	・幹事、舞名守
5	阿部富五郎	公務員	55	・理事、 <small>おおも</small> 大供
6	斎藤 末治	会社員	32	頭舞
7	阿部 甚吉	建築業	40	祭堂頭(天狗鼓)
8	斎藤富太郎	農業	62	舞子
9	斎藤 光雄	〃	41	掛鼓
10	黒藤 俊彦	会社員	23	舞子
11	斎藤隆之助	〃	22	〃
12	斎藤 亨	小学生	11	鈴子舞
13	阿部賢三郎	農業	30	舞子
14	畠山与七郎	病院勤務	47	・理事、笛
15	畠山 信夫	公務員	29	笛
16	阿部敬三郎	会社員	39	鼓
17	畠山熊五郎	公務員	45	権現守、笛
18	稲村 隆良	自衛隊員	27	鼓守
19	稲村倉左エ門	公務員	57	
20	安倍 洋直	神職	47	宮司・会長
21	安倍 良行	神職	25	称宜
22	晴沢 直見	神職	70	宮司・顧問
23	阿部 末治	土地家屋調査士	74	・副会長
24	阿部隆之助	社長	41	・理事
25	小林隆太郎	農業	40	・理事
26	阿部儀三郎	〃	50	・理事
27	阿部 藤男	〃	56	
28	阿部 章男	〃	42	
29	畠山 幸祐	会社専務	44	
30	大畑 義美	木林業	43	
31	阿部六之助	農業	42	
32	阿部 長悦	〃	41	
33	阿部 好信	森林組合員	52	
34	阿部 岩雄	農業	59	
35	阿部 義美	〃	43	
36	阿部 和義	〃	52	
37	渋谷金次郎	会社員	66	
38	渋谷 勇	森林組合員	33	
39	阿部甚之助	公務員	51	・理事(監事)神社総代
40	阿部 富治	農業	49	・理事、神社総代

番号	氏名	職業	年令	備考
41	阿部 甲蔵	農業	72	
42	阿部 幸作	〃	55	・理事、祭堂係
43	阿部 祐司	〃	43	小博士
44	阿部己之松	〃	67	三人博士
45	阿部 文男	〃	48	四人博士
46	阿部 隆三	左官	42	五人博士
47	阿部重五郎	地方公務員	73	六人博士
48	阿部 正	農業	54	鼓打ち
49	阿部一二三	〃	43	笛
50	阿部 勇吉	左官	42	笛
51	阿部 一郎	製材業	55	・理事、部落会長
52	浅石 嘉七	農業	71	・理事(監事)部落保存会長
53	浅石林一郎	〃	68	・理事、部落保存会副会長
54	成田 正雄	〃	62	・理事、部落保存会副会長
55	浅石勇太郎	〃	65	・理事、部落保存会会員
56	田中 一三	〃	45	・理事、部落会長
57	浅石 仁吉	〃		駒舞
58	大里 吉衛	〃		駒舞
59	浅石 福弥	〃		工匠舞
60	田中 敬二	〃		太鼓
61	成田 正治	〃		工匠舞
62	作山長志郎	〃		工匠舞
63	浅石 康明	農協職員	27	工匠舞
64	浅利 雄造	農業	62	祭堂係

資料Ⅱ・左義長(大日堂舞楽)五大尊舞と祭文

一、神子舞

一、神名伝舞

右は一人づつ鈴、紙垂を持ち笛、大鼓に合わせて舞う

一、本舞

東方降三世夜叉明王

南方軍多利夜叉明王

西方大威徳夜叉明王

北方金剛夜叉明王

中央不動明王

右三度繰返し大博士「唱え」あり

又三度繰返し大博士唱え

又三度繰返し

一、二人舞(大小両博士)

ウンテーレレ、ウラヤローロイ、ウンドフローオタヤ

## 大日堂舞楽調査報告

ローイ、ウンドフロォタダローイロロ、ウンテレー  
レウラッローイウンドフロォタダローイロロ  
二人舞終って大博士・踏板の上で唱えあり  
大博士そのまま鈴を振り五人は東方金剛を一度行う。

### 一、一人舞（大博士）

祭文二人舞に同じ、早くずしのところ。

テレウラッ ロルイロ タダロレヤロ タダロレヤロ

### 一、天竺震巨

テンジクシンタドォフセテ、サカムネホトケ、トキタ  
モウ、モンへサラリ、クニクニ、ドウサツドノヒ  
ヤク、シニウシシゲンノ、ニギリノ、ニギノーン  
クマノヘマイルモ、ミチノコソ、カラタチバヤシ、ヤ  
ッターヤクシモトニコソ、ヒヤクノカネデコンニチ  
ヒカル、ハギノハシラ、オーバシラー、ニギリノー  
ショウ、デワノクニニ、コソツキママハヤマシタカ  
ヤクシハ、トユドンノ、十一面ノクワシノカンノニキ  
リノニギリノショウ

### 一、サゲダマルイロ

ルイロロ へへ サゲダマ へ サゲダマ へ の時は対  
面の時

### 一、中サ

ハイウルーレェ ローロ ウンタダローエヤ ローヤ  
エ ローロ ウルレーロータダ ロレロ へへ

### 一、オサウチ

ウンテレー、テーレイヂルダーハアチルモチール、イ  
ヅルダ、チルモチルイスルダー へへ

### 一、チュイ

ハーチュエ へ テーレ、ウラーロー、ンンローワ  
ローロー、ハーチルレヤ、ウンテレー、テーレテー  
レー

### 一、六人立

ハーチールリヤ、ウンテレー、テーレテーレ、テー  
レーレー

### 一、カジキルイロ

ルイロロ へへ ツララ へ ルイロヨ（ツララ へ ル  
イロヨの時、対面の時）

### 一、ハナコツミ

ハイウローリャローロ、ウンタダローワッローワ、  
ローロ（三度繰返し）ハイイザァロー、コドモラ、  
ン、 ヲツツミニアレサ トードトハイ ナニ  
ハナツミニ ボタンカラオイ、アオイ、キクノハトア  
ーナ、ハイウローレェローロー、（三度繰返し）ハイ  
ネーロ へ コドモラ、ン、ソレダレニネーレ、ネーロ  
ネーレ、ハイオクジョート ハンココニネーレネーロ

ネーレ、ハイウローレエローロー、ウンタダローワ  
ッローワッローロー、（三度繰返し）ウローロータダ  
ロレロ へへ

### 一、六人立舞

ハイチマン、ゴーゲン、テーレテーレ、ゴーンダイ  
ーソーンウン ハチマン、ゴーゲン、テーレテーレ、  
ゴードイソーンウン ゴードイソーンウン ゴーダイ、  
ミョウオーテーレテーレ、ゴードイソーン 終って  
大博士九字を切る 踏板を踏むこと前の如し 以上

### 管理責任者

宗教法人 天照皇御祖神社

宮司 晴 澤 直 見

秋田県鹿角郡八幡平村

### 五大尊について

人皇第四十四代元正天皇の時都から音楽博士下向して  
今日の大日堂舞楽を伝えた。

昭和二十七年文部省から無形文化財として指定された。  
舞楽は、神子舞、神手舞、修法舞、大行事、権現舞、  
工匠舞、鳥遍舞、鳥舞、田楽舞、駒舞、五大尊舞にわか  
れる。その他祭幣、初押の行事等あり、谷内、長峯、小  
豆沢、大里4ヶ部落の純人によって行われる。

### 五大尊（六体尊ともいう）

1. 金剛界大目如来（大博士）
2. 胎藏界大日如来（小博士）
3. 普賢菩薩
4. 文珠菩薩
5. 八幡菩薩
6. 不動明王

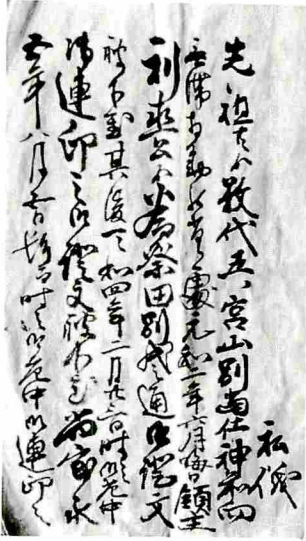
袴、脚絆、打越を着、白梵天を冠り、面をつけ太刀を  
抜き持ち、大博士の鈴、大鼓、祭文に合わせて舞う。

註 この名簿は、1974年12月1日現在のもので  
安倍洋直会長宅を訪れた際、好意により頂戴  
したものである。

この資料は、谷内部落より奉納される「五  
大尊舞」の詞章を表わしたものである。原本  
は晴次直見宮司の手書きによるもので、調査  
者はそれをコピーして保管してある。今回は、  
谷内の部を割愛し、次号に譲ることとなった  
ため、本資料を先がけて掲載するものである。

資料Ⅲ 古文書

A 大里一の庭文書（現・浅石家蔵）

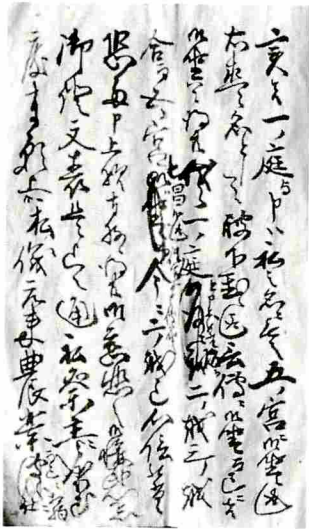
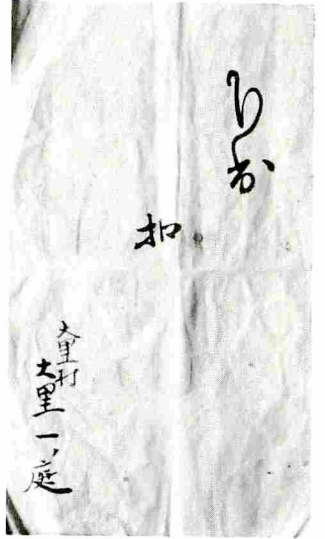


先祖共より数代五ノ宮山別当仕  
無滞相勤罷有候処元和二年六月晦日領主  
利直公より為祭田別紙之通証文  
御下置其後天和四年二月廿三日時之御老中  
御連印之御証文被下置尚宝永五年八月五日頓而時之御老中御連印之

下書

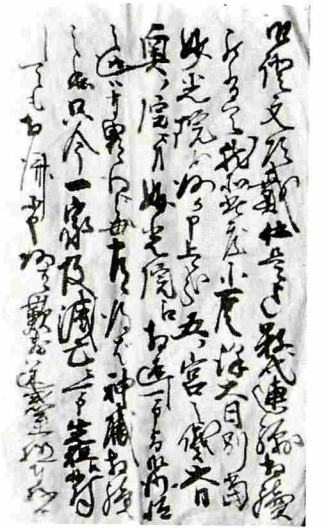
扣

大里村  
大里一ノ庭

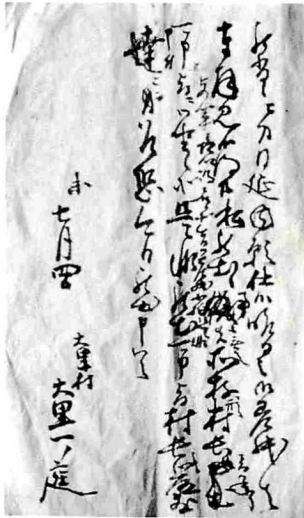


実者一ノ庭申ハ私之名ニ無ニ五ノ宮ニ御坐候趣  
右直々名として被下置候趣言任ニ御坐候ニ者  
御坐候得共我等一ノ庭申上罷有候隨而二ノ越三ノ越  
合而五ノ宮ニ唱候趣往古より申伝御坐候、今ニ二越迄心  
恐能上候  
御注上候  
御注文表是迄之通私祭主ニ被成下置  
度奉願上候私儀元來農業而已ニ相拘  
専らニ仕  
以

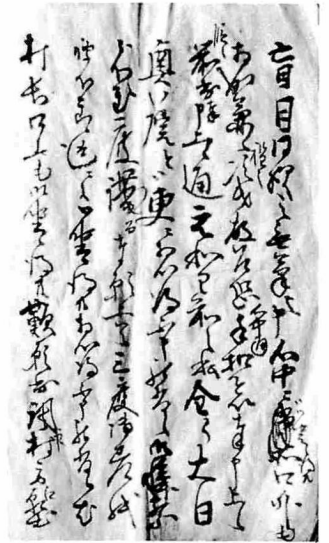
御証文頂戴仕是迄数代連綿相統  
罷有候然所此度小豆沢大日別当  
妙光院より付妙光院ニ相返し可申旨御沙汰  
之趣ハ奉畏候得と母、左候得ハ神職相統  
之私只今一家及減亡ニ可申先祖ニ対  
しても相濟不申何共數數迷惑至極奉存候



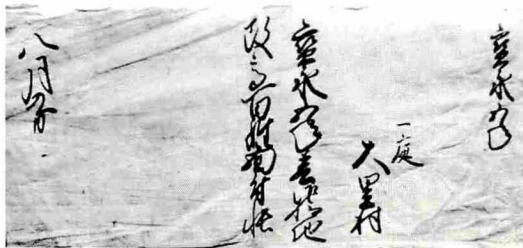
大日堂舞樂調査報告



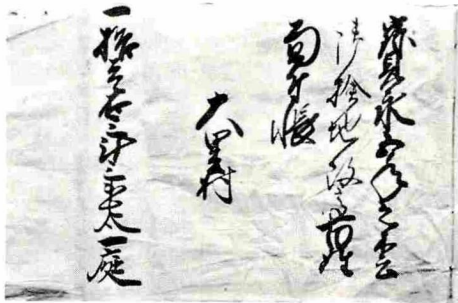
罷有候 = 付日延内願仕候、昨日之御差紙者  
 奉拜見候得共、私罷出候事、無之御差紙者  
 可申旨 = 御坐候処、候処今日御差紙  
 儀者所存形村長、而承り  
 申付、是非罷出可申旨村長御屋敷  
 達、而乍恐今日罷出申候  
 未七月四日 大里村  
 大里一ノ庭



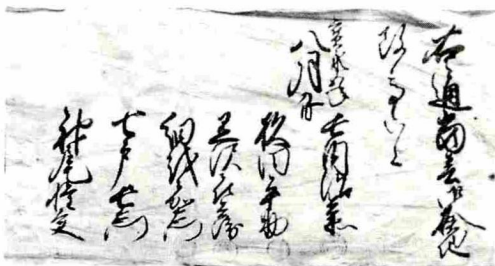
盲目同様之無筆者中心中ハ御座候得共  
 相成兼程之、心中通、有之候処口外も  
 候次第故乍恐手扣を以奉申上候  
 段々、前書奉申上候通元和己前之私全く大日  
 奥ノ院とハ更ニ相心得不申罷有候御憐察  
 被下置候謹而奉願上候三度御差紙  
 被下置候趣ニ者御坐候得共相心得不申罷有候  
 村長口上も御坐候得共歎願書調印村方江願出



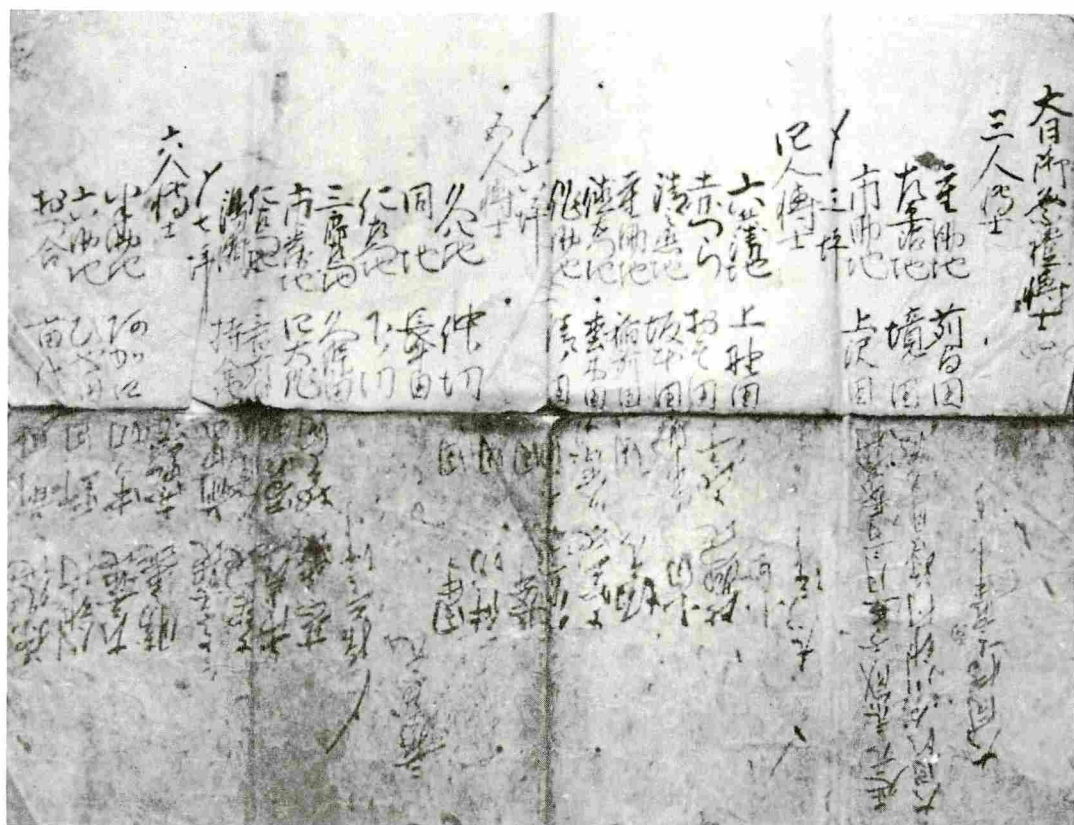
宝永五年  
 宝永五年春御檢地  
 改高百姓面付帳  
 八月九日  
 一庭  
 大里村



宝永五年之春  
 御檢地改高百姓  
 面付帳  
 大里村  
 一拾壹石三斗三升七合 一庭



右之通当春御檢地  
 改高候以上  
 宝永五年  
 八月九日  
 長門治兵衛  
 杉田平助  
 黒沢嘉兵衛  
 細越嘉右衛門  
 七戸長衛門  
 神尾權太夫



おつ合	六助地	六人博士	七坪	湯瀬	仁左衛門地	市兵衛地	三郎左衛門地	仁左衛門地	同地	久八地	五人博士	六坪	作助地	徳右衛門地	重助地	清之丞地	赤つら	六兵衛地	四人博士	三坪	市助地	左平治地	重助地	三人博士	大日御祭礼博士	
苗代	ひや田	阿加田	持合地	三百苺	四大作	久保田	下ノ切	長牛田	仲ノ切	清ノ田	李木田	稲苺田	坂本田	おそ田	上野田	上沢田	境田	苺局田	大	延元	大	境田	重助地	三人博士	大日御祭礼博士	
藤作地	川部村	左平治地	勝之丞地	与兵治地	嘉右衛門地	市	甚之丞地	舞	元	長牛	嘉衛門地	小田	小	小	廿坪	延元	元	小	小	延元	元	延元	境田	重助地	三人博士	大日御祭礼博士
前田	野田	中ノ切	西野亦	前田	久田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田

C 小豆沢大日堂蔵「御用書留帳」(部分)

